

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	西郷 南海子
論文題目	ジョン・デューイと「生活としての芸術」 —1920年代から30年代の進歩主義的教育哲学と実践		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文はジョン・デューイが提唱した美的経験に根ざした民主主義の構想についてその現代的意義を探究した論文である。論考は、デューイの教育哲学が教育現場や地域コミュニティにおいてどのように実践されるかという観点から行った。本論文ではデューイの美的経験論の核となる「経験としての芸術」概念を、より具体的な「生活としての芸術」という文脈に落とし込み、実際に1920年代から30年代に行われた進歩主義的な芸術実践を考察することを通じて、デューイの教育論と芸術論を架橋する構想を示した。</p> <p>本論文第I部では「デューイの教育哲学—美的経験を根幹とした民主主義の構想」と題して、芸術を媒介に人々の相互作用を活性化させようとしたデューイの教育哲学を理論的に考察した。第1章では、デューイの教育哲学の要点は、人々の経験を目的に対する手段という従属関係におかず、手段の中で目的が実現されていくプロセスとしてとらえる点にあることを論じた。このプロセスの中で看取される民主主義のヴィジョンについて、第2章ではデューイが参画したバーンズ財団を主題に、その多文化的な展示の意図を考察した。第3章では、芸術の社会的機能を重視するデューイが、進歩主義教育のいわゆる「子ども中心主義」の表現活動に対して行った批判とそのねらいを考察した。これらの議論をふまえて、本論文第II部の「万人のための芸術—『芸術の民主化』と『芸術による民主化』」では、デューイ的な美的経験に根ざした民主主義の構想がどのように実践されえたのかを追った。まず第4章では、庶民の日常生活こそが絵画の主題としてふさわしいと訴えた「アメリカン・シーン」の登場に着目し、その代表的画家ジョン・スローンと彼に学んだ北川民次の美術教育思想の意義について考察した。続いて第5章では、デューイを含む進歩主義教育者たちのメキシコの芸術教育への関心に着目し、北川らの「生活の中で生活を描く」というメキシコ児童画の実践が、第3章で取り上げた「子ども中心主義」の表現活動が抱えていた課題を乗り越える方法を示唆していたことを論じた。続いて第6章では、上述のように1920年代から30年代にかけてアメリカ美術界と教育界が連携して取り組んだ「芸術の民主化」と「芸術による民主化」の結実として、世界大恐慌下の連邦美術計画について考察した。</p> <p>本論文各章での議論を経て、本論文冒頭で提起した問いに対しては、以下の応答を提示した。第一に、本論文で考察した「芸術の民主化」は、芸術体験へのアクセスを抜本的に改善するという物理的な側面と、芸術の主題そのものを変革するという概念的側面の双方を指し示していた。第二に、このような取り組みを通じてもたらされる「芸術による民主化」は、立場の異なる人々の経験が作品を通じて出会い、お互いの知覚を変容させるという社会連帯の意義を有していた。これらの「芸術の民主化」と「芸術による民主化」は表裏一体の関係にあり、人々の日々の経験の再構成をうながすはたらきとして芸術をとらえなおす「生活としての芸術」であった。</p> <p>デューイたちは人種や階級によって人々の経験が分断されている状況に立ち向かったのであるが、その課題は今日も継続している。わたしたちの社会が抱える問題は一人ひとりが解決しようにもあまりにも複雑かつ巨大で、無力感にとらわれる場面も少なくない。一方で、本論文で焦点を当てた進歩主義的教育哲学においては、民主主義</p>			

の機能不全に対しては、民主主義を放棄するのではなく、「より一層の民主主義」で応じようとした。こうした地道さとラディカルさが表裏一体となった進歩主義思想の核心には芸術のはたらきへの信頼があり、それは今日においてもなお重要性をもつことを本論文では考察した。

今後の課題として、理論的な側面においては、デューイの美的経験論とりわけイメージネーション論を精緻に考察することや、デューイが諸外国の文化や教育システムに対して行った評価を再検討することが挙げられた。また実践的な側面においては、人種、性別、社会的属性などによる分断が加速させられているアメリカ社会において進歩主義的な哲学が果たしうる役割について議論することが示された。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、デューイの美的経験論を主軸に、芸術と日常生活を結びつけることによってその双方を刷新しようとした、1920年代から1930年代にかけての進歩主義的な教育哲学とその実践の現代的意義、とりわけ、デューイのいう「生き方としての民主主義」を支えるものとしての美的経験の重要性を解明したものである。デューイの美的経験論に示された民主主義の構想が、教育現場、そして地域コミュニティでいかに生きうるかを探るべく、生活としての芸術がいかに生きた実践として歴史上で具現化されたかを示した。

本論文の特徴は、(1)美術教育、美術史、教育哲学、フィールドワークをつなぐ領域横断的研究であること、(2)歴史研究であると同時に進歩主義教育の現代的意義を理論と実践の双方から解明する研究であること、(3)アメリカ美術館のフィールド調査や、北川民次によるメキシコ児童画の進歩主義的实践の史料調査などを取り入れた国際性に富んだ研究であることにある。哲学的アイデアが、人々の生きた実践によって行為へと翻訳されていくあり様を、理論的、歴史的、実践的に描き出した研究である点が評価された。

本論文の優れた点は、以下の三点である。第一に、デューイ研究として見たときに、後期芸術論と前期・中期の教育論を架橋する研究である点が独創的である。第二に、芸術教育が民主的コミュニティの構築に果たす役割を明らかにすべく、デューイの直接、間接の影響を受けた進歩主義的实践のみならず、デューイ「的」な実践にまで射程を広げたことは、デューイ研究の中でもフロンティア的研究として位置づけられる。第三に、具体的なアート、美術教育のフィールドなどをつぶさに観察する生きた目を備えた研究である点が秀でていいる。論文の記述は、読む者の歴史へのイメージネーションを掻き立てるリアリティをもったものであり、今、デューイ研究を行うことの意義を生き生きと伝えるものである。

以上のように本論文は、人文学の危機が取り沙汰される時代にあつてデューイの芸術論と美術教育が果たす現代的意義を示す研究としてそのオリジナリティが高く評価された。同時に、政治性を美的なものという観点から捉え直し、民主主義を問い直す教育人間学的視座を提供する研究であることが評価された。

試問においては、以下の問題点も指摘された。(1)進歩主義的歴史観を評価する文献が古く限定的である点。(2)デューイ「的」実践をどのようなものとして捉えるかの定義のあいまいさ。(3)第I部におけるデューイの美的経験の分析が「相互作用」という観点を超えてよりつぶさに語られれば第II部のデューイ的实践がより豊かなものとして描き出されたのではないかという点。こうした課題は今後のさらなる発展に向けた指摘であり、本論文の価値をいささかも下げるものではない。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年1月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降